



IUFRO-J NEWS

No. 92 (2007.11) —

IUFRO 拡大理事会報告—現在の大きな動き

東京大学農学生命科学研究科附属演習林 鎌田直人

(第7部会 Deputy Coordinator)

2007年5月29日から6月2日に、中国北京市北西に位置する中国林業科学院において、IUFRO 拡大理事会と関連するシンポジウム（5月29日）、会議（5月30・31日）、エクスカージョン（6月1・2日）が行われた。日本からは、IUFRO 理事の中静透氏（東北大）、第3部会 Deputy Coordinator の酒井秀夫氏（東大）、第4部会 Deputy Coordinator の吉本敦氏（東北大）と筆者が出席した。会議・エクスカージョンの詳細については、本ニュース掲載の報告をお読みいただくとして、IUFRO に関係した現在の大きな動きを以下に紹介する。

2010年に韓国ソウル市のCOEXで開催される第23回IUFRO世界大会について、2007年3月にソウルで、IUFRO 管理委員会（Management Committee）が、会場の視察、現地実行委員会との会合を行い、準備が順調に進んでいることが確認されている。また、現在、世界大会のCongress Scientific CommitteeをUSAのJohn Parotta氏がリーダーとなって進められている。シンポジウムの企画などに積極的に参加していただきたいと思う。

第23回世界大会の前年にあたる2009年8月18～25日に、アルゼンチンのブエノスアイレスで、FAOの世界林業会議（World Forestry Congress）が開催される。こちらへの参加も検討していただきたい。FAOとの協力関係を発展させるため、2009年のIUFRO 拡大理事会は、この会議にリンクして開く予定になっている。

現在、IUFROではワーキンググループの活動に関する評価が行われており、今後は不活発なワーキンググループを廃止・統合していくことになる。これに関係して、部門（Division）間のさらなる協力や再編についても、SC委員長であるNiels Koch氏と第7部会のコーディネーターであるMicael Wingfield氏が中心となって進めていく。また、前会長のRisto Seppala氏が中心となり、活動に不熱心な役員（Division, RG, WP）のリストラも検討されている。

今回の拡大理事会出席にあたりIUFRO-Jから旅費の支援を受けました。記して、お礼申し上げます。

訂正のお願い

前回発行のNo.91 P2の著者名（委員長の氏名）に誤りがありました。

（誤）

（正）

委員長 吉田俊也 → 委員長 丸井英明

お詫びして訂正いたします。

IUFRO 拡大理事会報告

東京大学大学院農学生命科学研究科 酒井秀夫

IUFRO 第3部会 Deputy Coordinator

1. IUFRO シンポジウム

IUFRO 拡大理事会に先立ち、5月29日(火)、IUFRO と中国林業科学研究院 CAF の共催で、「森林政策立案における森林研究の挑戦と機会」と題してシンポジウムが開催された。中国林業科学研究院長の江沢慧女史 (Jiang Zehui) らの挨拶のあと、下記の発表が終日行われた。

- 遺伝的に操作した樹木の利用と問題点 (Yousry El-Kassaby, カナダ)
- 森林と水質・水量の関係 (Ian Calder, 英国)
- 森林の大気中二酸化炭素濃度減少に対する役割と可能性 (Werner Kurz, カナダ)
- 伝統的な森林知識と先住民の参加 (John Parrotta, 米国)
- 違法伐採 (Andreas Ottitsch, 英国)
- 絶滅危惧種と自然保護 (Robert Szaro, 米国)
- 森林科学情報のマスメディアへの伝達 (Max Krott, ドイツ)
- 科学と政策のインターフェイス (Richard Guldin, 米国)
- 国際的な森林政策における IUFRO の展望 (Peter Mayer, オーストリア)
- 国際的な森林政策における FAO の展望 (Jan Heino, イタリア)
- 南アジアにおける優先的研究 (Sue See Lee, マレーシア)
- 中国における優先的研究 (Shirong Liu, 中国)
- ヨーロッパにおける優先的研究 (Heinrich Spiecker, ドイツ)
- 北米における優先的研究 (Perry Brown, 米国)

この企画の中心は、IUFRO 副会長であるブリティッシュ・コロンビア大学 John Innes 氏である。最初の8題は、IUFRO が9件設定しているタスク・フォースである。IUFRO Executive Director の Mayer 氏は、研究を強化し、パートナーシップを広げ、意志の疎通を強化することを述べた。各演者は斯界を代表するだけあって、密度の濃い発表であった。聴衆が主に会議メンバーと中国研究者に限られていたが、ウェブで公開される。

2. IUFRO Science Committee (SC)

5月30日(水)、中国林業科学研究院で開催された。

まず、前年5月にウィーンで開催された SC の内容について承認をした。

Strategy 2006-2010 について、SC に関する実行状況について議論した。研究強化については、部門の評価、例えば Division の再編もありうるということであった。研究協力における科学者会員の増加策については、勧誘のためのガイダンスが提案された。また、地域会議の定期的開催に関して、アジアでの開催が提案された。学生を積極的に会員に取り込むことが提案された。

次に、各部会から活動報告をいただいた。第1部会は2009年9月にスウェーデンでスブルースの会議開催予定とのこと。第3部会はメイリングリストを作成し、フラッシュ・ニュースの配信を行っている。活動を外部からも見える形にし、重要事項について直接情報のやりとりができるようにした。これに対して、どのように毎日ウェブをチェックするのかという質問があった。第5部会からは、今年台湾、ハンガリーでミッドターム・ミーティングが開催されるとのこと。第6部会からは WWF との協力について報告があった。第7部会からは、気候変動を受けて、研究グループの再編が述べられ、活動が不活発なグループについての処置が話題になった。第8部会については第3部会との交流が他の部会から提案された。

SC 管轄下にあるタスク・フォースについては、前日にシンポジウムで報告がなされたが、「知識の現状」に関する出版が重要な仕事であり、多くの投稿者の参加が呼びかけられた。

午後からは学際分野の協力について話し合われた。SC 内で学際分野をどのように協力させていくかについて、第3部会の Heinemann 氏から、温暖化でいろいろなことがかわりあうようになってきた、Strategy をどう統合していくか、今後意見の集約が必要であり、その方法について論じられた。

緊急を要する課題として、第3部会からバイオエネルギーの経済性について話題提供があった。エコツーリ

ズムについては、経済性、環境破壊、持続性から第4, 6, 7, 8部会から発言があった。気候変動が重要な問題になっており、とくに造林に関して将来的なことを考えていかなければならないことから、2008年8月に第1部会が中心となって部会間の会議が予定されていることが披露された。

夕方、表彰、出版、SC Congressでそれぞれ専門委員会が開催されたが、部外者の委員は、夕食までの間、林業科学研究院の近所にある清朝の夏の離宮として有名な頤和園への観光があった。

3. IUFRO 拡大理事会 (EB)

5月31日(木)に開催された。参加者は約60名。

前年5月にウィーンで開催された拡大理事会の内容について承認をした。このときの内容についてはウェブで公開されている。拡大理事会の内容は、PC (Policy Committee), SC との重複があるが、ここで最終的合意がなされる。

会長、副会長、Executive Director の報告と、会員動向の報告があった。カンボジア、ミャンマーからの入会が承認された。International Forestry Students' Association から代表2人が昨日のPCから参加していることが報告された。

Strategy の実行に関して、テーマを下におろしていくと、研究グループの実力では、5年では短くて解決がむずかしいとの意見があった。Koch 副会長からは、研究グループの活動採点導入の提案があった。

気候変動が重要な問題になっており、2008年8月にEBと協力して外部からも見える形で第1部会で部会間の会議をスウェーデンで開催し、13回世界大会につなげていくことになった。

タスク・フォースに関しては、炭素循環の会議、遺伝子操作をした樹木に関するFAOからのレポート、絶滅危惧種と自然保護に関するサミットとレポート、伝統的森林知識に関するポリシー摘要の作成などが報告された。

緊急課題として、バイオエネルギーがあげられ、多くの部会を含むことから、ユフロも指導力を発揮すべきとの発言があった。外来菌種による樹病に関して第7部会、エコツーリズムについては第8部会で対応することになった。内部的にはITを使って意志の疎通をはかり、外部的にはプレス・リリースしていくことが提案された。Lee 会長からは緊急課題についてシンポジウム開催の提案があった。一方で、IUFRO は緊急課題に対して速やかに対応できる体制がなく、部会間の協力が不足し

ているとの発言があった。分野と検討事項をめぐって、相互協力が必要であり、部会コーディネータや副コーディネータ、研究グループコーディネータの会合の必要性が述べられた。

次いで、PCの報告があり、同時に理事会への勧告がなされた。新しいタスク・フォースとして、Human-health well-being が認められ、Hannu Raitio 氏がコーディネータとなり、今までの森林住民の生活改善(今回未発表)と伝統的森林知識の両タスク・フォースとの共同が認められた。タスク・フォースの森林科学情報の伝達が出版委員会と共同で2008年のPCまでに出版される。次回の47回拡大理事会は2008年にナイロビで予定されており、エイズと森林に関するシンポジウムが検討されていることが披露された。理事からは遠方との難色も示されたが、日程が検討された。当初2015年開催予定の25回世界大会が、14回FAO世界林業会議と重なっており、2014年開催の提案がなされ、Seppala 前会長からは、ユフロはあくまでも科学に重きをおき、本来ユフロ独自の大会であり、アイデンティティを失うことのないようにという意見があったが、FAOと相談しながら両方に参加できるように2014年にむけて検討していくことになった。会期は役員の任期とも関連してくる。2011年は国際森林年であるとのアナウンスがあった。

関連会員、維持会員、賛助会員、国単位での会員と、会員分類の変化が報告され、2006年の会計報告と会費納入状況が示された。長期的な資金支援、基金の設立、外部資金について話題が出されたが、一方でどの組織も同じ状況で競争相手が多いことも指摘された。

昼食の後、フィンランドのEero Mikkola氏をコーディネータとするGlobal Forest Information Service (GFIS)の立ち上げが認められた。

昨年のウィーン会議以来の成果として、科学技術のイニシアチブのために、Collaborative Partnership on Forest (CPF)によって、CIFOR, CBD-S, ICRAF, FAO, UNFF-S, IUFROの6者間で協定が結ばれた。次は具体的な計画について検討がされていく。

途上国に対する特別プログラムとして、昨年チリでの若手を中心とする科学者支援プログラムの活動報告があった。半分为女性であったとのこと。今年6月にサバで、8月にエクアドルで、12月にケニアでワークショップが開催される。またKeep Asia Greenが出版される。アフリカに対してはICSUの活動がある。

2010年までの地域の研究課題について、理事のSue See Lee 女史とShirong Liu氏から、前日のシンポジウ

ムと重複しながらプレゼンがあった。この他に、生態的リスクアセスメント、ロシアの森林火災、用語のコンセンサス、ロシアや中国の木材貿易について、話題提供や問題提起があった。

パートナーシップや国際協力について、ITTO との覚書や、2009 年 FAO 世界大会がブエノスアイレスで開催されることなどが報告された。

専門委員会からの検討結果の報告と理事会に対する提案がなされた。表彰に関しては、年齢でなく、最近の業績であることが確認された。International Forestry Students' Association の修士論文も表彰の候補に上がることになる。途上国への配慮についても意見があった。役員選出委員会からは、次期役員の選出方法と投票日程について提示があり、次期会長は副会長から、コーディネータは副コーディネータから選出されることになっ

た。役員選出委員会の構成についていろいろな意見が出された。

最後に今後の IUFRO 会議の予定が示され、韓国から 2010 年世界大会のプレゼンがあった。

4. 所感

時代の流れが急速に大きく変化するグローバリゼーションの現代にあって、研究の優先度と実践、戦略を立てる思考様式は大いに参考になる。将来日本から森林総研等の研究機関や行政からの IUFRO への積極的参加が望まれるところである。

ユフロの情報、会議内容はウェブで逐次公開、更新されているが、更新情報について、日本国内、あるいは関連団体に、どのように伝達、周知するか、そのシステム作りが早急に必要と感じた。

IUFRO Policy Committee 報告

東北大学生命科学研究科 中静 透
(IUFRO 理事)

IUFRO のポリシー委員会は、5 月 30 日（水）に行われた。まず、各自の自己紹介が行われ、議題と前回のウィーン会議の議事録が承認されたあと、前回の委員会でペンディングとなっていた件についての討議が行われた。その後、承認された議題に従い、討議が行われた。

前回ペンディングになっていたのは、IUFRO の理事の選出に際して、性別や出身地枠などのバランスをもっと考えたほうがいいという問題であった。とくに、理事に女性や若い研究者、アフリカ、ラテンアメリカからの理事を選出すべきであり、それにはどうしたらいいのか、という点について議論がなされた。確かに、これらの問題は、他の国際的機関と比較するとバランスが悪いというのは、皆が認めるところであった。しかし、実際には IUFRO の理事として会議に参加するには所属機関から旅費のサポートが必要であり、女性や若い研究者はそういうサポートを得にくい立場にいる人が多く、アフリカやラテンアメリカでは機関がそこまでサポートできないという現実があることも事実である。改善策について、事務局にそれぞれの理事が自分の意見を電子メールで述べる、という宿題が課せられた。

以下、その他の議題のなかから、とくに重要と思われる

ものについてその内容を概説する。

1. IUFRO Strategy 実行の現状について

IUFRO Strategy 2006-2010 にそった活動内容について報告と討議があった。とくに、CIFOR, ICRAF, UNFF などとの協働を強めることについて、その現状報告と今後の方針についての議論があった。また、アフリカ、南アメリカなど地域での IUFRO 活動を活発化することについての議論が行われた。また、今回の EB 開催を通じて、中国の会員を増やしたいということ、それにはどうするかという点が特に議論された。

2. タスクフォースからの報告

各タスクフォースから、現状と問題点について報告と議論があった。Communicating Forest Science からは、もっと女性や参加国を増やす必要性、Forests and Water Interactions からは、政策とのリンクを強めるためにコンサルタントなどの利用も必要では、という議論がされた。Forest Science-Policy Interface では、UNFF との協働を強め、SPDC を通じた協力もありうる、Illegal Logging and FLEGT からは低インパク

ト伐採の結果やアセスメントに関する出版を行うことなどが報告された。

また、新しいタスクフォースとして、Forests and Health が提案され了承された。日本人では宮崎さん（千葉大）が実行委員候補に名前が挙げられていた。キックオフミーティングが2007年8月にフィンランドで予定されている。

3. 新たな課題

とくにPCから提案する問題として、気候変動に対する森林の適応の問題が提案され、これに対してどのように取り組むかについて議論された。その結果、具体的には科学委員会の委員長も含めて Divisions 1, 7, 8 とタスクフォース Forests and Water などから数人のグループをつくり、検討することになった。

そのほかには、HIV/AIDS and the forest sector やITを生かしたコミュニケーションやガバナンスの問題が論じられたが、これらについては具体的な検討体制を組むところまでは決定しなかった。

4. UNFF のサポートと CPF

UNFF のサポートのために、Collaborative Partnership on Forest (CPF) の MOU が CIFOR, CBD-S, ICRAF, FAO, UNFF, IUFRO の間で結ばれ、IUFRO も正式に UNFF に関わってゆく体制ができた。今後、科学と政策の協力関係を強めていく必要がある。今年秋の UNFF 会議にむけて、PC, SC の委員長と関係する DC を中心に提案を練る。

5. SilvaVoc Terminology Project

このプロジェクトは終了する。成果などは、GFIS のサイトなどに引き継がれる。

6. IUFRO-ITTO の MOU

一般的な内容の MOU であり、今後 ITTO との共同プロジェクトをおこなってゆくことになるだろう。

7. FAO World Forestry Congress 2015

あとの EB での議論にも出てくるが、IUFRO の World Congress と開催年が重なるため、どうするかが議論され、2014 年に前倒しで行ってはどうかという提案を EB にすることになった（EB でも了承された）。

8. そのほかの話題

ICSU（国際学術連合）や IUCN（国際自然保護連合）との協力関係を強める必要性、e-mail による投票や承認のやり方の改善、時期 World Congress（韓国）の準備状況などが報告、議論された。

全体の感想

IUFRO 全体に資金不足であり、新たな資金獲得が必要であることが何回か話題にものぼっていた。日本も、かつて SPDC や SilvaVoc などでも重要な貢献をしていたが、最近はそれが難しくなっている。それを考える上で、CPF のような仕組みができ、IUFRO が UNFF の科学的助言を主体的に担うようになることは、国からのサポートを受ける上で重要だと感じた。また、大学院生の組織（International Forestry Students' Association）から2人の代表（修士課程の学生）が会議に出席しており、きちんと意見を述べている姿には感心した。日本からも、この組織に積極的に参加してみてもはどうだろうか？ また、それを可能にするサポートも必要かもしれない。

IUFRO 拡大理事会後エクスカージョン報告

東北大学大学院環境科学研究科 吉本 敦
(IUFRO 第4部会 Deputy Coordinator)

IUFRO 拡大理事会後、6月1, 2日の1泊2日で下記のように2つのコースに分かれてエクスカージョンが企画された。日本からの出席者では酒井先生（東大）と私の2人がコース2に参加した。

コース1:

- 6 / 1 Mi Yun Reservoir（蜜云水源流域）
Ba Da Ling Great Wall
- 6 / 2 Long Qing Xia Ravine

Dingling Museum—Emperor Wanli's Tomb

コース 2:

- 6 / 1 Mi Yun Reservoir (蜜雲水源流域)
Cheng De Summer Resort (避暑山莊)
- 6 / 2 Wooden-Club Mountain
Pu Ning Temple (普寧寺) and Small Potala Palace (小ポタラ宮)

両コースの参加者は蜜雲水源流域までは同じ経路で行動を共にした。比較的「万里の長城」への参加者が多く、コース 2 は 10 名程度の参加であった (写真-1)。蜜雲水源流域は、現在北京の水供給源として重要な役割を果たしており、中国北部では最大級の水源である。北

京より 100 km ほど北西に位置し、43.7 億 m^3 のキャパシティがあると言われている。エクスカージョン当日はあいにくの天気であり水源内部を観察することができなかったが、その分担当局の方の説明に多くの参加者が耳を傾けた (写真-2, 3)。蜜雲地域を後に、我々は河北省にある避暑山莊に向かった。北京からのガイドの方々に現地のガイドが加わり、世界遺産の説明を受けた。磬鍾峰へ行くリフトからは植林された松などが見られ (写真-4)、リフトに同席したドイツのハンス氏とアグロフォレストリープロジェクトの一環だろうかなどとは愛もない話をしながら、エクスカージョンを満喫した次第である。

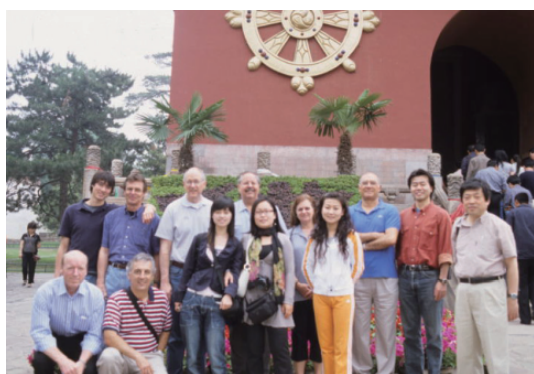


写真-1 コース 2 集合写真



写真-3 説明に聞き入る参加者



写真-2 蜜雲地域水源プロジェクト説明



写真-4 磬鍾峰公園リフトから

IUFRO 国際研究集会

「次世代のための森林の役割—森林資源管理の哲学と技術—」

FORCOM2004 概要報告

FORCOM2004 実行委員会 内藤健司・松村直人

1. はじめに

2004年10月17日から22日にかけて、国際研究集会「次世代のための森林の役割—森林資源管理の哲学と技術—」(International symposium on the role of forests for coming generations, 略称 FORCOM2004)が宇都宮大学において開催された。このシンポジウムは森林計画学会が中心となり、宇都宮大学、カナダの Northern British Columbia 大学、ドイツの Göttingen 大学、国際森林研究機関連合 (IUFRO) 第4部会の共催によって実施された。参加者は日本人56名、外国人23名、総勢79名で、インドネシアからの参加者5名をはじめ、カンボジア、中国、ドイツ、バングラデシュ、ボスニアヘルツェゴビナ、カナダ、チリ、フィンランド、ケニア、韓国、マレーシア、ネパール、ロシア、スイス、トルコ、アメリカ合衆国、台湾など世界各地から参加者が集まった。

10月17日の夜、ホテル・ニューイタヤにおいてアイス・ブレイクが行なわれ、本集会が始まった。10月18日から20日までは宇都宮大学峰キャンパス内にある大

学会館において基調講演7件、それ以外の口頭発表25件、ポスター発表26件の合計58件の発表が行われた。その後、エクスカーションとして10月21日の午前には栃木県栗野町の(有)高見林業を訪れ、民有林経営の実態を見学し、午後には足尾町の松木沢で足尾砂防作業所長から足尾銅山と公害の歴史について説明をうけた。10月22日にはつくば市にある森林総合研究所を訪れ、各研究室と施設を見学した。

2. 開催主旨

1972年に報告された「成長の限界」から20年後、1992年の地球サミットにおけるリオ宣言など、近年地球環境の保全への関心は世界的に高まりを見せ、東西冷戦構造の崩壊という状況変化もあって多民族国家における少数民族の人権や先進国と発展途上国の経済発展のギャップなど、諸問題を克服するための新しいパラダイムが求められている。

森林資源管理はこれらの問題と深い関わりを持っており、「持続可能な森林の経営・管理」という新しい概念が提案されている。本シンポジウムはメインテーマとし



写真-1 講演終了後の記念撮影

て、「次世代のための森林の役割—森林資源管理の哲学と技術」を取り上げ、「持続可能な森林の経営・管理」という観点から、現実の森林資源をいかに取り扱うべきか、またそのための技術や経験について意見交換を行い、次世代に引き継ぐ森林資源の多様な役割について議論して、21世紀における森林資源管理の展望を社会に示すことを目標とした。

3. 基調講演

基調講演は10月18日から20日の3日間、各日の朝の最初に行なわれた。初日の18日にはまずKlaus von Gadow氏（ドイツ、Göttingen大学）の「科学的手法に裏付けられた森林資源管理」、吉本敦氏（東北大学）の「政策や意思決定支援のための森林管理システム」、Gonzalo Paredes氏（チリ、Austral大学）の「人工林の戦略的管理における数理モデル」の3件が講演された。Gadow氏の報告では研究成果に基づいた森林管理の必要性について、続いて吉本氏の報告では森林資源管理における数学モデル活用の重要性について、Paredes氏の報告では人工林の戦術的及び戦略的な経営における数理計画モデルの重要性について指摘された。

2日目の19日にはMatthias Dobbertin氏（スイス連邦森林・雪・景観研究所）の「ヨーロッパにおける森林成長研究」とKevin Boston氏（アメリカ合衆国、Oregon州立大学森林工学科）の「主要林産物の供給連鎖管理システム」の2件が講演された。Dobbertin氏の報告では、森林成長研究の歴史的変遷が概説され、ヨーロッパにおける1980年代の森林衰退と最近明らかになってきた成長量増加の2つの相反する現象を説明するには、多面的な長期観測が必要であることが指摘さ

れ、実際に最近の気象観測データを用いた成長解析結果が示された。Boston氏の報告では、供給管理、計画、需要管理、実行、報告の5つの機能を持つ主要林産物の供給連鎖管理システムが紹介され、林産物企業が顧客サービスと業務効率の両者を増加させて競争力をつけるには、このシステムが不可欠であることが指摘された。

3日目の20日にはOscar Garcia氏（カナダ、Northern British Columbia大学）の「数理モデルにおける時間概念と空間概念およびスケールの違い」、Lauri Valsta氏（フィンランド、Helsinki大学）の「フィンランド民有林における炭素固定の経済的評価」の2件が講演された。Garcia氏の報告では森林管理に関するモデリングの際に適切な時間やスケールの理解が必要であること、Valsta氏の報告ではフィンランド民有林を対象にした炭素固定の経済的な評価について論じられた。

4. 口頭発表

口頭発表は7つの主題、8つのセッションに分けて行なわれた。すべての発表に対して、海外からの参加者を中心に聴衆から積極的に質問や意見が出され、有意義な議論が交わされた。発表内容の詳細については、龍原ら（2005）の報告を参照されたい。

セッション1：「森林経済学」（4件）

セッション2：「地理情報システムとリモートセンシング」（4件）

セッション3：「森林管理」（3件）

セッション4：「森林に関する哲学Ⅰ」（3件）

セッション5：「森林に関する哲学Ⅱ」（3件）

セッション6：「二酸化炭素問題」（3件）

セッション7：「森林調査と計量生物学」（3件）

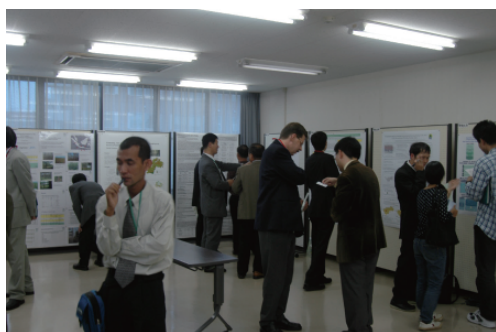


写真-2 ポスター会場の様子



写真-3 高見林業の見学

セッション 8:「林学一般」(2 件)

5. ポスター発表

ポスターは期間中ずっと貼られていたが、発表は A と B の二つのグループに分かれ、A (12 件) が 10 月 19 日、B (14 件) が 20 日に発表した。このポスターセッションは十分な時間が確保されていたが、参加者相互の関心は高く、次のセッションの開始ぎりぎりまで熱心な議論が交わされていたのが印象的であった。

6. プロシーディングス

シンポジウムへの投稿論文は編集委員会の査読を経て、最終的に 41 編が収録され、総頁数 521 頁のプロシーディングスとして森林計画学会出版局より発行された (Naito 2005)。

7. 宇都宮宣言

今回の成果を取りまとめるために主な参加者が大会期間中に議論し、「森林管理に関する諸科学を応用して、森林景観の管理のために科学的な支柱を！」という大会宣言を取りまとめた (Naito 2005)。

8. シンポジウム総括

森林計画学会が主催した国際研究集会は 1991 年 10 月にもつくば市で行なわれたが、今回の国際研究集会では大学院生を含め若手会員にも口頭発表の機会が積極的に与えられた。また、各セッションの座長も従来よりも若い年齢層に割り振られ、つくばの集会と比べて大きく様変わりしたという声を聞いた。今回の集会は次世代のための森林の役割について議論するための場であったが、森林計画学会の次世代の育成にも大いに貢献したと思われる。2005 年夏のオーストラリア・ブリスベンでの IUFRO 世界大会へ向けて、いい機会になったと思われる。ただ、今回の集会は大学の授業期間中に行なわれたということもあり、途中から参加した方、途中で帰られた方、授業のため一時的に帰られた方などが多く、国内の参加者で研究発表があった 3 日間ずっといた方はあまり多くなかったように感じた。各大学とも以前のように授業を休講にすることが難しくなったという声を

多くの方から聞いた。多くの方がじっくり参加できるようにするためには、大学の授業期間中をはずして開催することが望ましいが、またその時期は、集中講義、実習、オープンキャンパスなどの大学行事も集中しており、調整が難しいと思われる。

9. おわりに

シンポジウムの報告が大変遅れてしまったが、その後、森林計画学会が主催、後援した国際シンポジウムは以下のものなどがある。また学会主催の昨年度の夏期セミナーには台湾からの教員・学生の参加があり、今年度の夏期セミナーは台湾で開催するなど、国際交流も深まっている。次回 2010 年の韓国での IUFRO 世界大会に向けて、研究・情報交換がますます活発になることを願っている。

・Silvilaser 2006, November 7-10 2006, Ehime Prefectural Convention Hall

・Asia Forest Workshop 2006 in 14-17 November, Kyushu University

Interdisciplinary and Transnational Discussion on Multiple Impacts of Forestry and Landuse Change in Tropical Asia

本報告を取りまとめるにあたり、龍原 哲 (東京大)、加藤正人 (信州大)、寺岡行雄 (鹿児島大)、野堀嘉裕 (山形大)、溝上展也 (九州大)、立花 敏 (森林総研)、山本伸幸 (森林総研)、村上拓彦 (新潟大) の各氏のご報告を参考にさせていただいた。ここに厚く御礼申し上げます。また IUFRO-J からの研究集会事務局助成に深く感謝します。

引用文献

Naito, K. (2005) The Role of Forests for Coming Generations—Philosophy and Technology for Forest Resource Management-. 521pp. Japan Society of Forest Planning Press.

龍原 哲・加藤正人・寺岡行雄 (2005) 国際研究集会「次世代のための森林の役割—森林資源管理の哲学と技術—」, 森林計画誌 39:65-70.

IUFRO 分科会「林木の根株腐朽病に関する国際集会」に参加して

北海道立林業試験場 徳田佐和子

群馬県林業試験場 小野里 光

本分科会は根株腐朽病における分類学、遺伝学、生態学、防除方法等に関する最新の研究紹介や意見交換を1954年から欧米やオーストラリアで実施しており、第12回目の今回はアメリカ合衆国で開催されました。開催期間は8日間と比較的長く、8月12日にカリフォルニア州のカリフォルニア大学パークレイ校で開会し、ヨセミテ、ラッセン、クレーターレイクなど各国立公園内の根株腐朽病被害地を視察しながら8月19日にオレゴン州メドフォードで閉会しました。発表・意見交換会が夜10時過ぎまで行われた日もあり、視察地はいずれも針葉樹高木林の大規模被害で圧倒されました。バスの移動距離はなんと約1,500 km（ちなみに東京～鹿児島間は約1,400 km）、シェラネバダ山脈からカスケード山脈方面の次の目的地へと疾走するバスの車窓からは、大山脈、大草原、大きな湖、大牧草地、大山火事跡の森林や草地、針葉樹林から針広混交林へなどなど、なんでもかんでも“大”のつく雄大な景色を堪能しました。IUFRO—Jの助成のおかげで、このような充実した内容の分科会に参加できたことに、とても感謝しています。

今回は欧米を中心とした17ヶ国から約70名、日本からは森林総研2名および報告者2名の計4名が参加しました。発表約70題のうち、マツノネクチャタケとナラタケ属菌に関する発表が約50題と大半を占めていたほか、フザリウム、マスタケなどによる根株腐朽病害についての報告がありました。

1. マツノネクチャタケの話

マツノネクチャタケ (*Heterobasidion annosum* s.l.) については、系統・分類、宿主の反応、疫学的な解析、生態、防除などといった多岐にわたる発表がありました。しかし、ホスト国であるアメリカ合衆国をはじめ欧米からの報告が圧倒的に多く、日本以外のアジアからの参加者がいなかったことが残念です。マツノネクチャタケでは古くから生物学的種の存在が知られていましたが、近年、分子生物学的手法の発達によって分類学上の検討や進化的背景の解析が飛躍的に進んでいます。「どういう系統のものなのか？ どこから来てどう広がっていつ

たか？」はいろいろな意味で興味深い話題であり、さまざまな国々の研究者が一同に集まるこの分科会では活発な議論がなされていました。菌も人も海を渡り大陸を横断するのだなあ感慨深いものがありました。北アメリカ大陸内での分布拡大と進化や、他国軍の駐屯によってイタリアのある地方に病原菌が持ち込まれて被害が広がったことがDNA解析によってわかったという報告もありました。森林を管理する上で、樹木病害についても「invasive species risk」の評価や長期間のモニタリングが重要であると感じました。一方、被害防除法としては、伐根処理によって感染経路を断つ手法の開発とその応用について複数の報告がありました。その中には *Phlebiopsis gigantea* や *Hypholoma fasciculare* など腐生性の菌を利用した生物的防除の開発とその応用に関してのものが最も多く、このほか尿素処理についての研究などが発表されました。全体的には、さまざまな規模・内容の研究：植物側の防御反応を化学的にとらえた細かい仕事から森林ギャップの原因となった根株腐朽菌を調査し森林動態のメカニズムを明らかにしていく仕事までが、文字通り世界各地で同時進行しているのだなあという印象を持ちました。

2. ナラタケ属菌の話

ナラタケ属菌では *A. ostoyae* に関する生息分布、遺伝、ジェネット、病原性、管理方法等について多くの発表があり、欧米において *A. ostoyae* が引き起こしている被害の深刻さをあらためて実感しました。米国では、*A. ostoyae* の病原性は系統によって異なるので、系統分類学的手法で各地域における *A. ostoyae* による被害の危険度を判断できるのではないかという説明がありました。また、*A. ostoyae* の生息適地を地温及び土壌水分から分析し、これをもとに作成したアメリカ西部地域の森林被害ハザードマップをUSDAがネット上で公開し始めました。オレゴン州南部では、被害対策として皆伐・間伐、樹種選択等による異なる施業を実施し効果を検証しています。カナダでは、ダグラスファーの産地により *A. ostoyae* に対する感受性が異なり、抵抗性の強い家系は温暖乾燥地域産であること、スイスアル

ブスでは 37 ha のジェネット、フランスでは海岸から内陸部へ移動していることが報告されました。欧米の *A. ostoyae* は、樹高数十 m 以上の高木林にも大規模な被害を高頻度で引き起こしています。日本で発生する被害と違う理由は何なのか、とても興味があります。また、*A. ostoyae* の接種源培養に数年を要して実施する接種方法は、今後の試験の参考になりました。

3. 現地見学

集会前日および開催期間中にかけて下記に示す現地の視察が行われました。どれも風光明媚な観光名所まで行きながらひたすら森林被害が紹介され、ほとんどの場合それで時間切れとなりました。たとえヨセミテ国立公園であっても、観光地として有名なポイントには目もくれずに入り口付近の立派な被害地を見学してそのまま次の場所（被害地）への移動です。よく吟味されたお勧めの被害地がハードな日程の中に詰め込まれており、それを超一流の解説付きで見学できて大変勉強になりました（図-1）。ただし、早口で行われた解説や討論のうち正確に理解できた部分は全体の数割しかないと思います。

なお、もともと参加人数が多かったうえ、興味のあるものの方へ好き勝手に突進してなかなか帰ってこない人々を集めるために、重要な説明があるときやバスが発する前にはカウベルが鳴らされました。不慣れな英語を聞き取ることができず大変でしたが、言葉よりわかりやすいベルのおかげでバスに乗り遅れることもなく助かりました。

8/11 大会前のエクスカーショ

カリフォルニア大学の案内で *Phytophthora ramorum* がナラ類などを枯死・衰退させる「Sudden



図-1 わかりやすかったポスター付現地解説

Oak Death」被害地 3 ヲ所を見学しました。本病は 1995 年にアメリカで初めて見つかった比較的新しい病害で、カリフォルニア沿岸とオレゴンの一部からのみ被害が報告されています。激害地を見学した際にはバスに乗車する前に靴底をスプレー消毒するよう求められましたが、その森林はマウンテンバイク用の公園として解放されており、見学中にも多くの愛好者が出入りしていました。研究者レベルで病害防除を論じることと、それを実行することの難しさを感じました。

8/14 ヨセミテ国立公園

ヨセミテ渓谷の針葉樹混交林（ボンデローザパイン、インセンスシーダー、ダグラスファー、オウソク、ブラックオーク）で、マツノネクチタケ、ナラタケ類、キクイムシなどでできたギャップを見学しました。ここでは 1972 ～ 2004 年にかけてのギャップ面積・数の変化と各ギャップの原因が調査されています。過去に山火事を受けた巨木も多数見受けられました。我々には奇異に見える黒こげの山火事跡であっても向こうの人にとってはエコシステムの一つであり当然の現象とのことでした。また、8 月は雨が少ないとのことで森林内の下草がないほど乾燥していたのも、日本のマツノネクチタケ、ナラタケ類が好みそうな環境とはずいぶん違っているように思われました。

8/16 モノ湖、ボーディー、タホ湖

標高 2000 m 近くに位置し接する川を持たない強塩湖であるモノ湖と、ゴールドラッシュに栄え廃墟となったボーディーを観光しました。被害地から被害地への経路にあるこれら 2 ヲ所だけは森林被害とは無関係の場所でした。タホ湖では湖沿岸の森林とそのマツノネクチタケを観察しました。

8/17 ラッセン火山国立公園、シャスタ山

公園内のキャンプ地で、マツノネクチタケ被害とナラタケ被害を見学しました。キャンプ地利用者に倒木・落枝の事故が起こらないよう森林を管理するためにも、根株腐朽被害を受けた危険木を把握し除去する必要があるとのことでした。

8/18 オレゴン南部、クレーター湖

高速道 62 号線沿いで *A. ostoyae*、*Phellinus weirii*（エゾノサビイロアナタケ）によるホワイトファー、ダグラスファーの被害を見学しました。日本では珍しい *P. weirii* がここでは枯死被害を起こしていました。絶



図-2 *A. ostoyae* 被害地における植栽試験

景のクレーター湖では屋内で地元ガイドの説明があり、紙芝居形式で解説しつつ大人を笑わせ盛り上げる技術に脱帽しました。最後に、ホワイトファーが *A. ostoyae* 被害を受けている針葉樹混交林に設定された施業試験地を見学し、施業の結果と今後の展望について討論がなされました (図-2)。

4. おわりに

徳田：

初めて参加した IUFRO の国際集会は、実り多く有意義なものでした。なんにしろ、朝から晩までスケジュールがばっちりて眠る時間以外は皆一緒であり、猛勉強？猛特訓？ここは虎の穴？？だったのが鮮烈でした。職場を離れ、よその国や機関・立場の人々と接することが、北海道のなかの自分の仕事について考え直すよいきっかけになったように思います。直接体験することによって、森林にしても菌にしても「ところ変われば……」ということを実感しました。信じがたいほどの熱意と熱弁をもってカリフォルニア部門の案内をしてくださった Dr. Matteo Garbelotto 氏ほかカリフォルニア大学スタッフ、後半のホスト役を務めた USDA (Dr. Gregory Filip 氏ほか) の方々など、分科会を開催して

くださった現地の皆様に深く感謝しています。また、今回の参加は、発表までの道のりを助けてくださった多くの方々の援助なくしては実現できませんでした。ここに改めて感謝の意を表します。

小野里：

発表も無事に終了し所期の目的は達せられましたが、発表に対する質問や回答、生活の面で英会話に支障があったことは否めませんでした。ただし、知りたいことは相手の方にカタコトエイゴと筆談で質問を繰り返し、なんとか理解できる回答を得ることができました (親切的な方ばかりでした)。言葉の壁は高かったのですが、気持ちは通じました (たぶん)。そして、美味美味と毎食食べ過ぎて以前に増して完満な体型になった私は、心身共に栄養をつけて帰国の途につきました。この分科会に参加するように私の背中を押してくださった方々、分科会参加中ご迷惑をおかけした群馬県林業試験場職員・作業員の方々、現地で発表準備のため夜遅くまで協力していただいた日本の方々に厚く御礼申しあげます。

なお、大会 Proceedings が後日発行される予定です。子細は IUFRO Working Party 7.02.01 にお問い合わせください。

次回は3年後の2010年にイタリアで開催予定です。

IUFRO ワーキンググループ S2.02.07

(カラマツ属の育種と遺伝資源) の国際シンポジウム :

Larix2007 の参加報告

北海道立林業試験場 来田和人

9月16日から9月21日までカナダのケベック州で開催された IUFRO ワーキンググループ S2.02.07 (Larix Breeding and Genetic Resources カラマツ属の育種と遺伝資源) の国際シンポジウム : Larix2007-Integrated research activities for supply of improved larch to tree planting) に参加し、ケベック州の林木育種の取り組みをつぶさにみることで、正直、衝撃を受けた。簡単にいえば、森林資源の管理は州政府の責任という考えのもと、林木の品種改良から苗木生産まで州政府が一貫して行っており、林木育種の研究成果が優良苗木の普及に直結している状況にあった。優良品種の開発は国、種子生産は都道府県、苗木生産は民間という状況にある日本とは大きな違いである。

本シンポジウムは、9月18日、19日にケベック・シティーで開催された Carrefour de la recherche forestière (ケベック州の林業関係の研究者、技術者、森林所有者の定期集会) との共同開催として開かれた。Carrefour de la recherche forestière 全体の参加者は2000名にのぼり、150のブースに加えて、大型の林業機械まで展示されていた。カナダの一地域の林業関係者の集まりだとは思えないほど盛大な大会であった。

ワーキンググループ Larix Breeding and Genetic Resources は、カラマツ属の遺伝育種学的研究の情報交換を行うことを目的としており、もともとは、ニホンカラマツとヨーロッパカラマツの産地試験を国際的な規模で行うために設立された。今回は Larix2004 (京都) から数えて3年ぶり、フィールドツアー4日間、セッション2日間の日程で行われた。参加者は30名程度で小規模な集まりである。日本からは私の他、秋田県立大学の高田さん、林木育種センターの武津さんが参加した。

フィールドツアーは、メープルシロップを採取しているサトウカエデ林の見学もあったが、ケベック州におけるカラマツ育種戦略の一連の流れを視察できるように組まれていた。

ケベック州は、カナダ南東部に位置し、面積は150万km²で日本の面積38万km²の約4倍である。人口は760万人で日本の6%にすぎない。森林面積は650万km²で、公有林が89%、私有林が11%である。年間1億5千万本の苗木が植栽されており、4,500万本は6つの州営苗畑で、残りはケベック州の林業用苗木生産局 (Office des producteurs de plants forestiers du Quebec) と協定を締結した17の民間苗畑で生産している。日本の苗木生産本数は、統計資料が見つからなかったので推測になるが、平成15年度の人工造林面積28,898haから計算して1億本を越えることはなく、カナダの1州であるケベック州の方が多い。1億5千万本の苗木を作るのに4億5千万粒の種子が必要とされるが、その80%は遺伝的に改良された州営の採種園1,127haから採取される。

ケベックにおけるカラマツ属の育種プログラムは、1970年代にアメリカカラマツ、ヨーロッパカラマツ、ニホンカラマツを対象に開始された。しかし自生種であるアメリカカラマツは成長が遅いことから、現在では、導入されたヨーロッパカラマツとニホンカラマツおよびその雑種を対象に育種が行われている。2003年からは成長、幹、樹幹の形状、病気への抵抗性を基準に選抜されたヨーロッパカラマツ、ニホンカラマツそれぞれ80クローンを対象に第二世代の育種プログラムが始まっている。フィールドツアーでは第二世代の次代検定林を視察したが、成長量は北海道と同じようなもので、選抜の進捗状況に大差はないと感じられた。しかし、日本と違うのはここからで、彼らは、育種成果をすぐに反映させることのできる種子、苗木生産システムを作っていた。

フィールドツアー3日目に視察した Berthier の種子センターは州の施設で、ケベック州の造林に必要なすべての種子の精選、品質検査、保存を行っている。常勤職員は5人に過ぎないが、最盛期には250人の臨時職員が雇われている。種子生産にこんな施設があるのかと思うほど大きい、年間の稼働日数が7ヶ月から10ヶ月

に及ぶこと、日本全体の必要量より2倍近くの種子を生産しなければならないことを考えると、納得させられる。

種子センターには、ヨーロッパカラマツとニホンカラマツの室内雑種採種園が併設されている（写真-1）。種子は人工交配で生産し、豊作年で40母樹から100万粒の充実種子を得ることができる。室内採種園の利点は、温室効果により開花時期が早まり、温室外の花期とずれるため、コンタミが少なくなることにある。欠点は生産コストが高くなることで、充実種子1粒あたり25セントかかる（カナダドルのレート：121円）。また、結実促進処理技術が確立していないので毎年確実に採取できない。しかし雑種カラマツの必要量が2008年に55万本で2012年に80万本で安定すると予想されていること、雑種カラマツの苗木は全量、さし木で生産する計画であることから、数年に一度、豊作があれば足りる計算になる。

最終日のフィールドツアーで視察した Saint-Modeste の州営苗畑は、常勤職員7名、臨時雇用395名で年間1千万本の苗木を生産している。その内訳は650万本がコンテナ苗、350万本が裸苗である。さし木、実生で区別するとさし木苗木が400万本（雑種カラマツ50万本、ホワイトスプリース・ブラックスプリース・ヨーロッパトウヒ350万本）、実生苗木が600万本である。ケベック州における雑種カラマツのさし木増殖方法（写真-2）は北海道で行っているものとほとんど同じであった。しかし、北海道では民間の生産者がそれぞれ数万本の規模で分散して行っているのに対して、彼らは、一箇所ですべて100万本近くのさし木苗木生産ができる体制を整えた上で取り組んでいる点が大きく違う。

ケベック州の林木育種に対する取り組みはセオリー通りといえばそれまでだが、遺伝的に改良された苗木を普及することに対する真摯な姿勢に感服し、その姿勢が日本と大きく違うことを痛感させられた。

これはディナーの席での話であるが、ケベック州の研究者から森林所有者には苗木を無償で配布していると説明を受け、驚いて日本では有償だと話すと「森林資源の管理は政府の仕事だ。なぜ売っている？」と逆に驚かされてしまった。それぞれの地域で行政システムや林業界の生産構造が違い、どちらがいいか一概には言えないが、考えさせられる話であった。



写真-1 ヨーロッパカラマツとニホンカラマツの室内雑種採種園

19日、20日にケベック・シティー・コンベンションセンターで開催されたセッションでは3人の基調講演があった。カナダの Yill-sung Park 博士は、アメリカカラマツの材積成長、幹の通直性は特定組合せ能力が高いことを説明し、そのような特徴を持つ樹木の増殖法として特定のクローンを増やすことのできる組織培養の重要性を強調した。日本の高田博士は、カラマツの材質は産地によって違いがあり、ヨーロッパや北米で品種改良の母材として使われているカラマツの起源をDNAマーカーで洗いなおすことが、今後、効率的に育種を進めていく上で重要になると指摘した。フランスの Luc E. Pâques 博士は、ヨーロッパカラマツとニホンカラマツの F_2 は、血縁関係のないもの同士の交配であれば F_1 と比べても成長量の低下が見られず、種子を得ることが難しい F_1 に変わる方法として F_2 が有効であると説明した。一般講演ではフランス、ロシア、日本、ドイツ、カナダ、スウェーデン、イギリスから計12件の発表があった。その内容は、カラマツ属の雑種形成、系統分化、産地間変異、検定林における成長や材質の遺伝特性、さし木や組織培養による苗木の増殖方法、雑種採種園の設計や雑種苗木の判定方法など幅広く、カラマツ属育種の今後の方向性について活発な議論がなされた。

今回の研究集会参加にはIUFRO-Jから参加助成金の交付を受けた。海外の林木育種に接する機会を与えて頂いたことに心からお礼申し上げます。

国際シンポジウム

「東南アジア産木材の樹種識別および産地特定技術」開催報告

森林総合研究所 木材特性研究領域 安部 久

9月25、26日の両日、東京大学農学部弥生講堂において「東南アジア産木材の樹種識別および産地特定技術に関する国際シンポジウム」を開催した。本シンポジウムは、森林総合研究所の交付金プロジェクト「南洋材の樹種識別および産地特定の技術開発」の研究報告会をかねたもので、森林総合研究所が主催し、IUFRO-J、IUFRO division 5、および日本木材学会組織と材質研究会の後援で行われた。

シンポジウムには2日間で117名の参加者があった。主な参加者は、大学、林野庁を始め、木材関連会社（住友林業、ミサワホーム、紀州造林等）、非政府組織（トラフィックイーストジャパン、地球環境フォーラム、FoE Japan 等）であった。

セッションは3部構成であり、シンポジウムを主催する森林総研理事長の挨拶の後の第1セッションでは、プロジェクトの研究背景となる輸入合板の木材樹種についての報告に続き、マレーシア森林研究所のLim Seng-Choon氏、インドネシアガジャマダ大学のSri Nguroho Marsoem博士から東南アジアにおける伐採樹種と樹種識別の現状について発表した。第2セッションでは、マレーシア森林研究所のLee Soon-Leong博士、インドネシアガジャマダ大学のSapto Indrioko博士から、東南アジアにおけるフタバガキ科樹木の遺伝子解析研究の現状に関して発表した。26日の第3セッションでは、木材の樹種識別および産地特定技術の成果とその応用に関して森林総合研究所の研究成果を発表した。まず、シンポジウム運営委員長が、研究プロジェクト「南洋材の

樹種識別および産地特定の技術開発」の概要を説明した。続いて、化学成分、木材組織、DNA、安定同位体・無機元素の分析による樹種および産地特定技術に関して発表した。最後に、それらの技術の応用例について研究成果が発表された。

シンポジウムの最後の総合討論では、産官学や非政府組織の方々から多くの意見や質問が寄せられ、議論が深められた。林野庁貿易対策室の森田室長から、消費者の安全・安心のための証明、木材の合法性、違法性証明のための技術の開発の要望があり、住友林業の中村主任研究員からは応用面は民間が取捨選択するので、森林総研には様々な技術の可能性を示して欲しいとの要望があった。京都大学生存圏研究所の杉山教授からは木材標本庫および関連するデータベースの現状に関する説明があり、今後、樹種・産地識別の研究のためには海外も含めた大学、研究所間での情報交換とネットワーク作りが大切であることが確認された。これに対して、DNAデータベースに関しては、森林総合研究所にスギ、ヒノキなどのデータベースが整備されてきており、さらに拡充していく旨が津村樹木遺伝研究室長から説明された。最後に、樹種・産地識別技術に関しては、天然林および人工林から生産される木材の合法性・違法性証明のための技術的な協力や、インドネシア、マレーシアといった熱帯産木材の生産国との協力関係を強化し、共同研究を行っていくことの重要性を確認した。そして、最後に総括として今後も森林総合研究所が中心となって、樹種・産地識別に関する技術開発を継続していくよう要望された。

事務局からのお知らせ

1. IUFRO-J 研究集会事務局・参加助成の募集について

平成 21 (2009) 年 3 月までに開催される IUFRO 関連研究集会に対して事務局・参加助成を行います(参加の場合は海外での集会のみです)。希望者は平成 19 (2007) 年 12 月末日までに、規定の書式にしたがい助成申請を提出してください。IUFRO 研究集会事務局・参加助成実施要領については、IUFRO-J NEWS No. 88 (2006 年 8 月発行) および下記ウェブサイトに掲載されています。助成申請書の様式も下記のウェブサイトからダウンロードできます。

<http://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/iufroj/jyosei.htm>

2. IUFRO-J メールニュースについて

2007 年 9 月から IUFRO-J のメーリングリストの運用を開始しました。冊子で発行している J-News を補完するものとして、会員間の情報交換に役立てたいと考えております。このメーリングリストは、事務局がメールアドレスを把握している A および B 会員の代表もしくは連絡員の方、C (個人) 会員に配信しています。機関内会員のメールアドレスを通知いただいた A および B 機関会員については、各会員に送信しています。当面は事務局主事(藤間)のメールアドレスのみから配信が可能な設定にしています。本メーリングリストを通じての情報発信を希望される方は、事務局までメールでご連絡下さい。事務局として初めての試みですので不手際もあるかと思いますが、会員の皆様からのご意見により改善していきたいと考えております。よろしくお願いいたします。

3. IUFRO-J による研究集会後援について

主催者(森林総合研究所)からの申請を受け、「東南アジア産木材の樹種識別および産地特定技術に関する国際シンポジウム」の後援を行いました。後援内容は、

IUFRO-J メールニュースでのシンポジウム開催案内です。同シンポジウムの概要については、本号掲載の記事をご覧ください。

IUFRO-J では、当会の目的に沿う研究集会について、後援内容が経費の支出を伴わないものである場合は、事務局で後援を決定し機関代表会議で報告することとなっています。研究集会の後援を希望される方は、1) 開催場所、2) 開催時期及び期間、3) 趣旨(背景、目的、内容など)、4) IUFRO との関係、5) IUFRO-J に依頼する後援内容、6) 他の後援団体、7) 連絡先等を明記の上、事務局までご連絡下さい。なお、後援内容については、経費の支出を伴わないことから「IUFRO-J を通じた事前事後の研究集会紹介、IUFRO-J 機関代表会議での紹介・報告など、広報支援」となります。

4. IUFRO-J 平成 20 年度機関代表者会議のご案内

第 119 回日本森林学会大会が東京農工大学で 2008 年 3 月 26 日(水)～29 日(土)の日程で開催されます。それにあわせて表記会議を開催致しますので、機関代表者の方のご参加をお願いいたします。

日時: 2008 年 3 月 28 日(金) 昼休み

場所: 東京農工大学内(詳細は未定)

議題: 会務報告、会計決算報告、監査報告、事業計画案、予算など

5. IUFRO-J News, メールニュースへの寄稿のお願い

IUFRO-J News, メールニュースの内容を充実させるため、IUFRO 研究集会の開催予定や内容紹介、森林・林業・林産業に関連する研究機関の情報等、会員で広く共有したい事項について記事をお寄せ下さい。会員相互の情報交換の場として「IUFRO-J News」「IUFRO-J メールニュース」をご活用下さい。

IUFRO-J News No. 92 平成 19 年 11 月 26 日

国際森林研究機関連合 - 日本委員会事務局

〒305-8687 茨城県つくば市松の里 1

森林総合研究所 国際連携推進拠点

TEL 029-829-8327, 8328

iufro-j@ffpri.affrc.go.jp

〔編集・発行〕